

活水学院校歌

作詞 相沢照子
作曲 オリーブ・カリー

- 一 樟のふたばをこの庭に
植えにし人をしのぶれば
わがみに及ぶ大神の
ふかきめぐみをおもふなり
- 二 生けるしるしの大いなる
秋津島根のいさぎよき
をみなとならん望みもち
つどへり我らこの庭に
- 三 七つの海のかなたより
ここよせきて栄えたる
文化は貴し昔より
世にさきがけしこの港
- 四 みくにを思ふまごころは
世の緑野みどりのにわきいでて
生ける泉のみなもとと
流れそそがんよろずよに

校歌について

ヤング校長時代には *Kwassui song* があり、ホワイト校長時代には大正十二年に募集され、制定された校歌があった。これは現在も「創立記念日の歌」として残っている。現在の校歌は、武藤校長時代に、校歌としてよりふさわしいものをと校歌の募集が行われ、昭和十七年（一九四二）十二月に「作詞 相沢照子・作曲 津川圭一」のものが校歌として制定された。

曲は、戦後 音楽科教授オリーブ・カリーによって、現在の曲に改められた。

(校歌第二節解説)

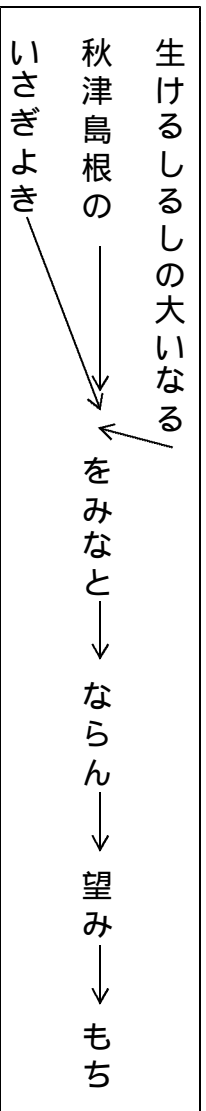
生けるしるしの大いなる
秋津島根のいさぎよき
をみなとならん望みもち
つどへり我らこの庭に

生けるしるし＝(キリストの復活を
証言する)生きている証人
秋津島根＝日本
いさぎよし＝心のきれいな
をみな＝女性 若い女性
をみなとならん|望みもち

「ん」(む) 意志を表す助動詞「む」
の連体形。(……ナロウ)

文構成

連用修飾語



主語
我ら

連用修飾語
この庭に

述語
つどへり

口語訳

(キリストの復活を証言する)生きた証人としての立派な女性になろう、
日本の心のきれいな女性になろうという志を持って、私たちはこの学院
に集まり学んでいるのです。

(校歌第三節解説)

七つの海のかなたより

ここによせきて栄えたる

文化は貴し昔より

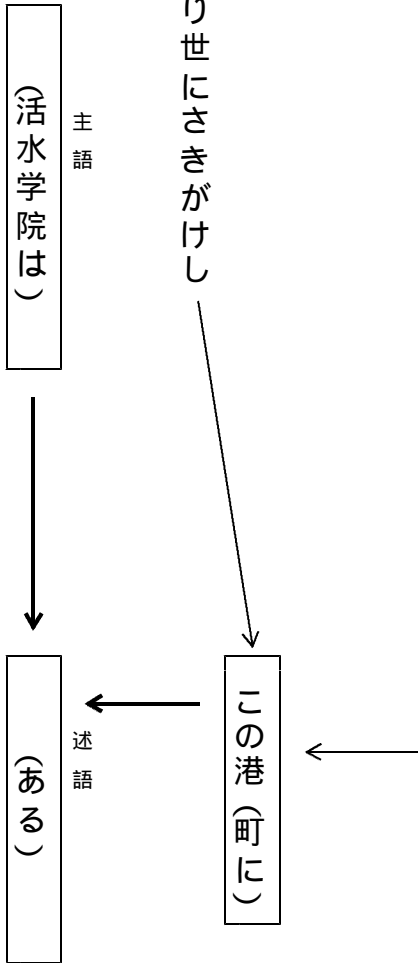
世にさきがけしこの港

たかし〓世間に広く知られている。
有名だ。

文構成

七つの海のかなたより ここによせきて栄えたる 文化は貴し

昔より世にさきがけし



口語訳

遠く多くの海を越えて、ここ長崎に来て栄えた長崎の文化は世間に広く知られており、昔から(海外文化を)他の地方より早く取り入れたこの港町長崎に、活水学院はあります。

（校歌第四節解説）

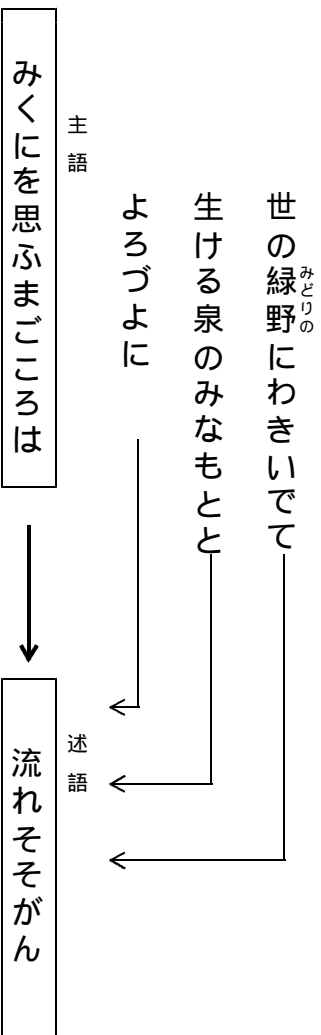
みくにを思ふまごころは
世の緑野^{みどりの}にわきいでて
生ける泉のみなもとと
流れそそがんよろづよに

生ける泉 = 活水学院
流れそそがん

「ん」（む） 推量の助動詞「む」の

終止形。（……ダロウ）

文構成



口語訳

神の国を信じる心は、緑の野に（水が）わき出すように、活水学院が源と
なって（これから先）幾世代に渡って永遠に 世に流れそそぐだろう。